

《発行》日本オゾン療法研究所 神力就子

No.25

オゾン療法研究 ニュース

統合医療の発展にむけて

2025.12

日本オゾン療法研究所への手紙

アカシア動物病院 獣医師 清水無空

この度は、ルーマニアでの国際会議に出席する機会を与えて頂き誠にありがとうございました。日本から、また獣医での唯一の講演であり、参加者にも一定の関心を持って頂けたものと思います。

今回、実はレナーテ先生にはお会いできませんでした。録画講義のみで、ご欠席でしたが、来年は IOA の会長に内定しているようです。

今度の国際会議は、主催国のルーマニア酸素オゾン療法学会(SSROOT)、EuroCOOP とその後援団体である WFOT との共催で行われました。ルーマニアでは**オゾン療法が一部認可になった**ようで、国際会議を開けるまでになりました。ブラジルもオゾン療法が一部医療認可されたことにより勢いがあります。ブラジルで開催された第8回 WFOT 会議では、約2000名が参加したそうです。WFOTが 2024 年 8 月にサンパウロ宣言というプロトコルを出しています。

日本医療・環境オゾン学会は、EuroCOOPの一員の立ち位置ですが、今回、上村先生がWFOTの会議に、出席を促されました。このあたり、各国、組織間の事情もあるので、我々としては個人参加という立ち位置になるのではないかと考えております。日本のこれからの役割も大きいと思います。また、いずれ、神力先生とレナーテとのこれまでのやりとりもお伺いしつつ、また来年以降も国際会議に参加する流れを作っていきたいと思います。

上記、手紙を清水先生から頂きました。文中のレナーテについて、説明を添付いたします(神力)。

レナーテさんは Renate Viebahn-Haensler 氏のことで、ドイツでのオゾン療法展開のリーダー的存在です。今日まで普及に努力し、オゾン療法を国際的に高めた功労者です。

オゾン療法は現在も決して、正規医療として成り立っているわけではありません。歴史的な事件として、1993年、第13回 IOA 国際会議(サンフランシスコ)で、米国が、オゾン療法のセッション開催に反対した事件がありました。参加した多数の医師たちは会場が無くて混乱しました。以後、米国開催の際は、オゾン療法セッションがセットされることはありませんでした。こういう変則状態のまま、2025 年を迎えております。その「オゾン療法のレナーテ」が国際オゾン協会(IOA)の次期会長に内定しているということに、私は世の進歩を感じます。IOA 会長ポストへの就任は、IOA 全体がレナーテのオゾン療法展開の努力、功績を評価したという事になりますね。

オゾン療法を通常医療に格上げしようとの動きも出てきている事と合わせて、私達も、もっと努力を傾注したいものです。

EuroCOOP (EUROPEAN COOPERATION OF MEDICAL OZONE SOCIETIES)

ヨーロッパ医療オゾン協力機構について

医療オゾンの利用をより効果的にするために、ヨーロッパ各国、日本そしてインドネシアの医療オゾン応用に関わる学会が、より緊密に協力するため、**2001 年に中央組織として「EuroCOOP」が設立されました。オゾン療法の標準化は大部分が達成され、2012 年にガイドラインとして公表されました。**同様に、加盟学会は相互に有効な研修および教育ガイドラインを提供し、オゾン療法のすべての適応症と応用方法について、可能な限りの規定を整えることを目指しています。EuroCOOP 自体は独立した学会ではなく、その理事会は加盟学会の理事によって構成されております。

WFOT (World Federation of Ozone Therapy) 世界オゾン療法連盟について

世界オゾン療法連盟(WFOT)は、2005 年 4 月 9 日にインド、ニューデリーで設立された国際的非営利組織です。その目的は、「医療オゾンのあらゆる医学的応用を推進すること」にあります。この目標を達成するために WFOT は世界中の同じ目的を共有する各国の学会を結集し、真の「連盟」を構築することを目指しています。また、国の学会が存在しない場合でも、医師、歯科医師、獣医師など個人での参加を歓迎しております。WFOT は、すべての医療専門職に対して、日常診療や研究活動における指標を提供することを目指しています。

歓迎のご挨拶 ルーマニア EuroCOOP、SSROOT

親愛なる同僚の皆さま、そして友人の皆さまへ

第 10 回ヨーロッパ・オゾン会議が 2025 年 9 月 25 日から 27 日までルーマニア、ブカレストで開催されますことを、心より歓迎申し上げます。20 か国以上から多くの参加者が集われたことは、世界的な困難の中にあっても、オゾン療法の発展とその認知に向けた私たちの強い結束の証です。

今回の会議では、新しい 2 日間のプログラム形式を導入し、集中的かつ多様で、挑戦的でありながら有益な科学的内容をお届けします。特に、参加する医師の皆さまに向けた講演やワークショップに重点を置き、最新の技術や治療プロトコルの成果をご紹介します。この会議は、すでにオゾン療法を実践されている方々だけでなく、研修医、医学生、そしてまだオゾン療法を行っていないものの、知識を広げ、国際的な専門家コミュニティと交流したいと望む多様な診療科の同僚の皆さまにも開かれています。

私たちは、ルーマニア酸素オゾン療法学会(SSROOT)が保健省と連携し、クラヨーヴァ大学およびティミショアラ大学医学薬学部において「オゾン療法専門課程認定証」を実現させたことを誇りに思います。これは、本分野における学術的教育と専門的基準を強化する上で大きな一歩です。

未来を見据え、私たちは協力を通じて、**WFOT 加盟国すべての当局からオゾン療法が正式に認められる日が訪れると確信しています。**

どうぞ本会議において、研究を共に進め、経験を分かち合い、オゾン療法の揺るぎない有益性を示す学術的成果を築いていただきたいと思います。

皆さまにとって、この会議が有意義な対話と永続的な協力関係に満ちた、実り多いものとなることを心から願っております。(清水翻訳)

ステファン・ティロン 医師 SSROOT 創設者、WFOT 前会長

ガブリエル・モゴシュ 医師 SSROOT 会長、WFOT 副会長

第 10 回 EuroCOOP 国際会議よりトピックスの紹介

アカシア動物病院 清水 無空

2025 年 9 月 25-27 日にルーマニアで開催された、第 10 回 EuroCOOP 国際会議において発表されたトピックスより、基礎、作用メカニズムについて紹介します。

トピックス： 基礎、作用メカニズム

1. 「予防と治療における医療オゾン — その未来は？」

発表者：Prof. Dr. Lamberto Re (イタリア・アンコナ大学)

イタリアの医師であり薬理学者でもあるランベルト・レ教授は、オゾン療法を「病気を治すための補助」だけでなく、「健康を維持し、病気を防ぐための基盤」として捉える新しい考え方を紹介しました。これまでの研究では、オゾンが体内の酸化ストレスを調整し、細胞の働きを整えることで多くの疾患に良い影響を与えることが報告されています。教授は、これらの科学的成果を踏まえた上で、今後は単に臨床効果を証明するだけでなく、国際的な制度やガイドラインの整備も重要になると指摘しました。

また、オゾン療法は将来的に、一般医療や予防医学の中で重要な役割を担う可能性が高いと述べています。そのため、各国での法的な承認や標準化への動きは、医療全体の発展に向けた前向きな一歩だと強調しました。

さらに、世界オゾン療法連盟(WFOT)は、こうした国際的な調整を進める中心的な機関として再編されつつあり、人間医療だけでなく獣医療分野にも広く応用が期待されています。レ教授は、オゾン療法が世界中で医療の一部として確立される未来を展望し、持続可能な医療の実現に向けた希望を語りました。

2. 「オゾンによるレドックス調節で守る — 虚血／再灌流障害からの細胞・臓器保護」

発表者：Dr. Renate Viebahn-Haensler (ドイツ、医療オゾン科学顧問 (IOA))

この発表では、心臓や脳などの臓器で起こる「虚血再灌流障害 (I/R 障害)」に対して、オゾンがどのように細胞を守る働きを示すのかが紹介されました。

虚血再灌流障害とは、血流が一時的に途絶えた後に再び流れ始める際、急激な酸化ストレスが生じて組織が傷つく現象のことです。これは手術や心筋梗塞、脳梗塞などでよく問題となるもので、臨床上の大きな課題とされています。

研究では、オゾンを適切な量で体に与えることにより、「酸化的プレコンディショニング」と呼ばれる軽度のストレス刺激を起こし、それが細胞の防御力を高めることが分かっています。具体的には、抗酸化酵素 (SOD やグルタチオンなど) が増加し、酸化ダメージの指標である MDA や TBARS が減少することが確認されています。

さらに、ラットを用いた実験では、オゾン処理によってミトコンドリアの新しい生成(ミトコンドリア新生)が促され、これは「適度な運動」を行った場合と同じような保護効果を示すことも報告されました。

このように、オゾン療法は単に症状を和らげるだけでなく、細胞のエネルギー産生や抗酸化機構を強化して臓器を守るといふ、予防的かつ再生的なアプローチとして注目されています。今後、心疾患や脳疾患などの予防・治療においても、オゾンの活用が期待される内容でした。

3. 「マロンジアルデヒド：血管機能障害における医療オゾンの新たな標的」

発表者：Prof. Dr. Olga Sonia Leon Fernandez (キューバ・ハバナ大学)

キューバのハバナ大学のオルガ・レオン・フェルナンデス教授は、医療オゾンが血管の老化や障害を防ぐ可能性について、独自の生化学的研究結果を報告しました。発表の中心となった「マロンジアルデヒド(MDA)」は、体内の脂質(脂肪)が酸化されたときに生じる物質で、酸化ストレス(さびのようなダメージ)を示す代表的な指標として知られています。MDAが増えると血管の柔軟性が失われ、動脈硬化や炎症など、さまざまな血管障害につながるということが分かっています。

教授の研究では、リウマチ性関節炎、アルコール離脱、糖尿病性足病変、高齢者群といった異なる疾患や条件を持つ患者を対象に、MDAの量を詳しく測定しました。その結果、いずれの疾患群でもMDAが健常者より高く、酸化ストレスの進行が確認されました。

そこで、オゾン療法を導入したところ、MDAの値が低下し、体内の抗酸化酵素(SODやカタラーゼなど)の働きが改善。酸化ダメージが軽減されるとともに、臨床的にも血流や症状の改善が見られたと報告しています。

フェルナンデス教授は、「MDAを抑えることが血管の健康維持に重要であり、オゾン療法はその有効な手段となる可能性がある」と述べました。この研究は、オゾンが血管老化や合併症の予防に役立つ可能性を科学的に裏付けるものであり、今後の臨床応用への期待が高まる内容でした。

4. 「科学的知識がどのようにオゾン療法の実践を改善できるか」

発表者：Dr. Emma Borrelli (イタリア・シエナ大学 医師・博士)

イタリアのシエナ大学のエンマ・ボレッリ博士は、医療オゾンを、より効果的かつ安全に活用するために、科学的知識を臨床現場にどう生かすかという重要なテーマを取り上げました。

博士はまず、オゾン療法の基礎や作用機序は世界中で多くの研究によって裏づけられているにもかかわらず、「科学的知識は理論にすぎず、実際の診療にはあまり役立たない」という誤解がいまだに根強いことを指摘しました。

その結果、多くの医師がメーカー主催の短期セミナーなどで「どの濃度でどのくらい投与するか」といった即効的な“レシピ”だけを学び、理論的背景を十分に理解しないまま臨床応用を行ってしまう傾向があると述べています。しかし、科学的基盤を欠いたままでは、複雑な症例や副作用への対応が困難であり、また商業的な誇張や誤情報を見抜けない危険もあります。

博士は、こうした課題を解決するためには、大学などの中立的な教育機関で体系的な科学教育を行うことが不可欠であると強調しました。さらに、医療機器メーカーも根拠のある臨床研究を支援し、実証されていない宣伝を避ける責任があると述べました。

最後にボレッリ博士は、実際の臨床症例を通して、科学的な理解が治療プロトコルの最適化や患者ごとの調整にどのように役立つかを示しました。科学的知識を持つことが、オゾン療法を安全で信頼性の高い医療に育てていく鍵であることを改めて強調する内容でした。

以下は参考：一般口頭報告、タイトルのみ列記。

Topic：「標準適応：肝疾患・腎疾患・慢性炎症」

1. Dr. Gabriel Mogos, Romania →「脂肪肝の治療と経過観察におけるオゾン療法の利点」
2. Dr. Vincenzo Simonetti, Italy →「長寿のためのオゾン療法とエピジェネティック因子との相乗効果」
3. Prof. Univ. Dr. Nicolae Bodrug, Moldova →「B型肝炎の進展に対する医療オゾン療法の影響」
4. Dr. Ana Moreira, Portugal →「高用量オゾン療法の安全性と有効性」
5. Prof. Univ. Dr. Dragos Marinescu, Romania →「慢性腎不全におけるオゾン療法の利点」

Topic：「痛み」

6. Dr. Matteo Bonetti, Italy →「高齢者の慢性腰痛に対するオゾン療法」
7. Prof. Dr. Umair Rashid Chaudhry, Pakistan →「頸椎神経根症に対する椎間板内オゾン治療」
8. Dr. Maria Marcvar, Romania →「三叉神経痛患者におけるオゾン療法の神経生理病態学および化学的作用」
9. Prof. Dr. Ahmed Amine El Oumri, Morocco →「慢性腱障害におけるオゾン療法：作用機序の洞察と15例の症例報告」
10. Dr. Tolga Ergönenç, Turkey →「ブラインド注射を超えて：リアルタイム超音波イメージングによるオゾン療法」
11. Dr. Krassimir Shelev, Bulgaria →「脊椎性疼痛に対するオゾンの有効性」
12. Dr. Eyal Attias, Israel →「創傷から健康へ：複雑な皮膚疾患治療における医療オゾンの役割」
13. Dr. Maria Emilia Gadelha, Brazil →「COVID-19 ワクチン副反応におけるオゾン療法の可能性」
14. Dr. Antonio Teixeira →「ブラジルにおけるオゾン療法規制：安全性と有効性の科学的根拠」

Topic： HEALTHY AGING「健康長寿」

15. Dr. Lale Yeprem, Turkey →「長寿とオゾン」
16. Dr. Irma Spinola, Mexico →「ロング COVID、オゾン療法と機能性医学」
17. Dr. Philip Mollica, USA →「オゾン水の生物学とヒト健康における役割」
18. Dr. Wilhelm Schüller, Germany →「オゾンと幸福な加齢 — 歯科領域における局所・全身応用による神経変性予防」
19. Prof. Dr. Sanda Cretoiu, Romania →「腸内マイクロバイオーーム-オゾン軸：作用機序の証拠からトランスレーショナル展望へ」
20. Prof. Eugeny Nazarov, Ukraine →「オゾン・水素・キセノン为例とした医療ガスの治療作用機序に対する現象学的アプローチ」
21. Dr. Renate Thielle, Austria →「一酸化窒素(NO)は低用量オゾンコンセプトの理由の一つか？」
22. Dr. Tarek Tanbouli, Egypt →「脳性麻痺児の管理におけるオゾン療法の効果」
23. Dr. Ali Al Assadi, Romania →「糖尿病性足病変におけるオゾン療法の有効性」
24. Dr. Ahmet Alp, Turkey →「再建鼻形成術における鼻皮膚損傷予防に対する医療オゾン療法の効果」
25. Conf. Univ. Dr. Adriana Botezatu, Moldova →「炎症性腸疾患患者におけるオゾン療法の利点」
26. Dr. vet. Nashiku Shimizu, Japan →「獣医療におけるオゾン療法の臨床応用：日本からの症例報告と最新トピックス」



国際会議参加者の集合写真 ブカレスト / ルーマニア 2025 年 9 月 25-27 日